宿場の遊女

遊郭・遊里をランクづけした「諸国遊所競」という番付がある。江戸の新吉原が行事をつとめ、京の島原と大阪の新町が大関に座る。下野では、前頭に宇都宮・喜連川・佐久山が顔を並べる。いずれも奥州道中や日光道中の宿場として賑わった町である。

街道沿いの宿場には、表面上は旅人へ給仕を行う飯売（めしうり）下女だが、実際には、遊女奉公を強制された女性たちがいた。公的には道中旅籠食売女（めしうりおんな）といい、俗に飯盛女と呼ばれた。三宿の遊女もこうした飯盛女であった。宇都宮に飯盛女が許されたのは安永年間（1772～81）とされ、目的は人馬継立てで困窮する宿財政を助けることにあったとされる。

飯盛女には越後（新潟県）出身者が多いが、周辺の農村からも奉公に出る者が少なくなかった。奉公に出る年齢は、10代の後半、年季は5～6年くらいで、なかには6歳で親から離れ養育期間も含め18年もの間奉公勤めをしなければならない女性もいた。

12　小山宿

小山宿は、江戸から12番目の宿場で、日光・奥州・甲州道中宿村大概帳では、街並みの長さが12町13間（約1.3km）、家が423軒（旅籠74軒、本陣1軒・脇本陣2軒・問屋場1軒）、町の人口は1392人（男636人、女756人）、駄賃・賃銭　荷物一駄・乗掛荷人共60文、軽尻馬1疋40文、人足一人30文でした。

小山はかって「五街道追分」と呼ばれたように、日光道中のほか、日光道中壬生通り、結城道、佐野道が集中する街道交通の要衝であった。

小山は、鎌倉時代から戦国時代にかけて活躍した小山氏の本拠地でした。江戸時代初期には譜代大名の本多正純が小山城主となり、城下の整備が行われて現在の小山市街地の基礎が造られた。本田氏の転封後に城は廃城となり、城跡には小山御殿が造られて徳川将軍の日光社参の際に休憩所となった。

日光道中略記によると「小山の名は和名抄（わみょうしょう）にも見えたれば、ふるき地名なることを知るべし」とあり、和名抄は承平年間（931～38）に成立した和名類聚抄のことだから、たしかに古い土地である。「天慶3年（940）田原藤太秀郷、平将門追討の宣旨を蒙り、東国に下りし時はじめて築城あり」思川畔の城山公園のお城である。依頼秀郷の子孫小山氏が守り、攻防をくり返し、後北条氏の持城になったが、北条氏滅亡と共に廃城となった。

「落城ののち、今の街道ひらけし故、人民も次第に往還の左右に移りて、元和3年（1617）日光御鎮座の後、宿駅の数に入り…宿内日光の方を上として上（城山町）中（中央町）下（宮本町）三町ならびに新町（天神町）、横町を合わせて小山宿と唱ふ」

また、日光名勝記によると「小山の町長し。此町昔は甚（はなはだ）広かりしといふ。町中に所々寺あり」上野下野道の記では「当今貸座敷（5軒）娼妓の玉は1分2朱なり。（昔は女郎や15軒あり）芸者は見番にて2朱と云ふ。明治より学校建築にて進歩の駅なり」学校施行から4年目の明治9年（1876）のことである。

雲助（くもすけ）

街道や宿場で駕籠や馬を勧めた人を雲助といった。時にはゆすり・たかりなどの悪事を働き、護摩の灰とも呼ばれた。文化5年（1808）、志賀理助が幕臣4人らと日光に参詣した。その仲間の一人、山崎驀旭は、今市宿でこう呼んでいる。

宿駕籠にもめるもさかる今市

よ内では棒であたまはり医師

当時、人を乗せる駕籠には、長棒駕籠・打上乗物・引戸駕籠・垂駕籠・宿駕籠・山駕籠などの区別があった。その中で庶民が利用するのは、乗駕籠・宿駕籠・山駕籠の類であった。理助は、日光道中の駕籠事情について『日光参詣旅行記』に次のように書いている。「すべてこのあたり徳次郎より大沢・今市・鉢石の宿には宿駕籠はなはだ少しより、ありとても掛木台にて乗るにはものなし、鉢石の宿には掛木台計りにてふとんなし、大沢・今市にはふとんはあれども駕籠は大かた壊れ、上がはは京たての破れたるをもつて覆ふおるばかりなり、されどもあしつかれたる折りにはなりふりに貧着なく駕籠ただあればよろこびて乗る事也」

駕籠も相当ひどいが、こんな駕籠を勧める駕籠かきは、どんな風体の人々であったろうか。雲助は、悪党人・無宿とともにしばしば街道の厄介者として取締の対象になった。

板碑

中世仏教で使われた供養塔である。基本構造は、板状に加工した石材に梵字＝種子（しゅじ）や被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだものである。頭部に二条線が刻まれる。実際には省略される部位分もある。

分布地域は主に関東であるが、日本全国に分布する。設立時期は、鎌倉時代から室町時代前期に集中している。

分布地域も、鎌倉武士の本貫地とその所領に限られ鎌倉武士の信仰に強く関連すると考えられている。

種類としては迫善（順修）供養、逆修板碑などがある。形状や石材、分布地域によって武蔵型、下総型などに分類される。ちなみに武蔵型とは秩父・長瀞地域から産出させる緑泥片岩という青みがかった石材で造られたものをさすが、阿波周辺域からも同様の石材が産出するため、主に関東平野に流通する緑泥片岩製の板碑を武蔵型、四国近辺に流通していたものを阿波型と分類している。また下総型とは主に茨城県にある筑波山から産出される黒雲母片岩製の板碑をさしている。地域、時代により形態や石材にバリエーションがあり、戦前から郷土史家たちの格好の研究材料であった。

戦国時代以降になると、急激に廃れ、既存の板碑も廃棄されたり、用水路の蓋などに転用されたものもある。

神鳥谷「しととのや」由来

その昔、近くに鷲城という出城が有り、鷲は神鳥とされ「しとと」と呼ばれていたので、谷の様な地形とあわせ、「神鳥谷」となったという説がある。

又「しとと」は「鵐」と書く鳥の名で、巫は神に仕える人なので神鳥と表し、神鳥谷を「しととのや」と言う説もある。

①安房神社

天慶2年(939)に藤原秀郷が平将門の討伐を祈願し、みごと戦勝し、守護神として厚く信仰したといわれる。また、中世にも小山・結城・佐野氏や古河公方足利氏などの諸氏からも崇敬を受けた神社。文政11年（1828）の狛犬や灯籠、文化8年（1811）石橋八個所供養塔がある。

「村の鎮守也。…神躰は天太玉命。往昔天照大神に仕へ、阿波国に移し、夫より当所に勧請し、粟の神社と称す。延喜式に寒川郡安房神社とあるは此社のことなり、むかしは此あたりも寒川郡に属せしなるべし」（日光道中略記）延喜式では、「阿房神社」とある。明治以降になると安房神社。地名は粟宮というが、昔は粟宮明神とも書かれている。

天太玉命を祖とする忌部氏は、徳島阿波から、千葉の安房へ移動したとされるが、ここへは、川を利用した水上交通により、安房から人々が移動してきたと考えられる。神社の西１kmには思川が南北に流れている。思川は、巴波川と合流し、渡良瀬川となって利根川へ流れ込む。

本殿に赤穂浪士討ち入りを描いた嘉永元年（1848）奉納の絵馬がある。

安房神社の西には小山氏時代の米蔵があり、その北には当時の獄屋跡もあるという。

②行人塚

「神鳥谷村往還より少々引込、字行人塚といへる塚有レ之」（日光・奥州・甲州道中宿村大概帳）

昔行き倒れの人々を葬った塚といわれている。場所未確認。

41　間々田宿～小山宿

栃木県小山市

安房神社　～　神鳥谷

（歩行距離 1953m 25分）

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/

JZE00512@nifty.ne.jp

巨大ムクノキ

粟宮三叉路